

# 身體部位慣用詞語的考察 —以「顏(KAO)」為主—

李毓清

實踐大學語言中心講師

## 摘要

本研究以 7 種慣用詞語辭典中有關「顏(KAO)」的慣用語為研究對象，欲探討各慣用詞語辭典中「顏(KAO)」慣用詞語的實際收錄情形。具體執行方式是抽取出各慣用語詞典裡「顏(KAO)」的慣用詞語；然後就其品詞別用法、詞語結構、語意用法做一比較分析。

調查結果：7 種慣用詞語字典中「顏(KAO)」的慣用詞語的收錄情形可以分為高收錄（4 種以上辭典）、低收錄（只有 1 種辭典）及集中收錄（慣用句詞語集中於部分辭典）3 種類型。

品詞別用法有動詞慣用詞語、名詞慣用詞語及形容詞慣用詞語。數量而言則是動詞（約 70%）>名詞（25%）>形容詞（3%）的順序。

有關詞語結構的分析：「顏(KAO)」的動詞慣用詞語有 9 種、名詞慣用詞語有 6 種、形容詞慣用詞語有 1 種形式。動詞、名詞雖各有 9 種及 6 種；實際上慣用詞語大都集中在 3 種形式上面。

而慣用詞語中發現到有「臉的樣子・狀態（臉形・容貌、表情・神色、態度・樣子）、化妝、出席・訪問、丟臉、名譽（面子）、知名度、人、不贊成、家人眾多、正眼看人、碰面、隱身、現身、有氣量」的語意用法。

關鍵字：顏(KAO)、慣用詞語、詞語結構、品詞別用法、語意用法

受理日期：2018.03.10

通過日期：2018.05.11

# **A Survey Research on Japanese Idioms of Body Part Concerning KAO**

Li, Yu-Ching  
Lecturer, Shih-Chien University, Taiwan

## **Abstract**

The purposes of the research were to explore the common usage of Japanese idioms of body part concerning kao(顔) by sampling from the 7 kinds of idiom dictionaries and to analyze the parts of speech, structure of idioms and semanteme.

The researcher found that there are 3 types of collected: high collected (above 4 kinds of idiom dictionaries), low collected (only 1 kind of idiom dictionary) and concentrated collected (concentrated on some of idiom dictionaries) in the 7 kinds of idiom dictionaries.

There were verb, noun and adjective idioms in the parts of speech. The percentages were ranked as verb (70%), noun (25%) and adjective (3%).

There were 9 verb idioms, 6 noun idioms and 1 adjective idiom in the structure of idioms.

There were several types of semanteme: face shape, states (shape, face, facial expression, look, attitude, look like), make up, present, visit, shame, fame, reputation, person, disagree, numerous family member, gaze, meet, disappear, appear and magnanimity in the common usage of idioms.

Keywords: KAO, idioms, structure of idioms, parts of speech,  
semanteme

# 身体部位詞の慣用句の考察

## — 「顔」を中心に —

李毓清

実践大学言語センター講師

### 要旨

本論では7種の慣用句辞典における「顔」に関する慣用句を研究対象として、各辞典における採録状況を考察したい。具体的には各辞典における「顔」の慣用句を抽出し、その品詞別用法、句構成と意味用法を明らかにしたい。

身体部位詞「顔」を学ぶ時に単なる言葉の部分的意味に限らず、より広いカテゴリーである「顔」の慣用句の使用状況、品詞別用法、句構成、意味用法を学習者に一層理解させることを研究目的とする。

調査した結果、7種の慣用句辞典において「顔」の慣用句の採録状況は、高採録率、低採録率、集中式の3タイプに分けられることがわかった。

品詞別用法では、動詞慣用句、名詞慣用句、形容詞慣用句があり、用例数は動詞（約7割）>名詞（2.5割）>形容詞（0.3割）の順序である。

句構成の分析について見ると、「顔」の動詞慣用句は9つ、名詞慣用句は6つ、形容詞慣用句は1つで、それぞれ句構成の形式があり、動詞慣用句と名詞慣用句の句構成は、ともに3つの形式に集中している。

「顔」の慣用句の意味用法には、「顔の様子・状態（顔形・容貌、表情・顔付、態度・様子）、化粧、出席・訪問、恥、面目・名誉、知名度（人脈）、人、不承知、家族の多いこと、人を正視する、会う・対戦する、姿を隠す、姿を見せる、両顔をくつつける、器量がよいもの」が見られる。

キーワード：顔、慣用句、句構成、品詞別用法、意味用法

# 身体部位詞の慣用句の考察

## — 「顔」を中心に —

李毓清

実践大学言語センター講師

### 1. はじめに

顔は頭部の前面にあり、目・鼻・口などがある部分で、個人を識別するとき、もっとも有効な身体部位である。慣用句<sup>1</sup>は、個々の単語から連想されるイメージを巧みに生かしているものが多く、同じ内容を他の言葉で表現するよりも、受け手に強く訴えかける効果がある（『慣用句の辞典』1994）。では、身体部位詞「顔」の慣用句にはどのような品詞別用法があり、句構成、意味用法があるのだろうか。

本論では『日本語慣用句辞典』（2005）、『慣用句の辞典』（1994）、『国語慣用句大辞典』（1988）、『国語慣用句大辞典』（1977）、『慣用句の意味と用法』（1982）、『国語慣用句辞典』（1969）『Weblio辞典』<sup>2</sup>（2017）（以下、7種の辞典）の慣用句辞典における「顔」に関する慣用句を研究対象として、各辞典における採録状況を考察したい。具体的には各辞典における「顔」の慣用句を抽出し、以下について明らかにしたい。

「顔」の慣用句に関して、何種の品詞別用法があるか、それらがどのように分布しているか、各慣用句の句構成はどのような形式であるか。また、何種の意味用法があるか。

身体部位詞「顔」を学ぶ時に単なる言葉の部分的意味に限らず、

---

<sup>1</sup> 慣用句：2つ以上の語が決まった結びつきをして、句全体の意味が個々の語のその意味を合わせても定まらないような慣用的表現。（「油を売る」「釘を刺す」「骨を折る」などの類）『ポケット版慣用句・事故ことわざ辞典』

<sup>2</sup> 慣用句辞典は合計15ほどあるが、本論で採用した7種はほかの辞典より詳しく陳述されていた。なお、『Weblio辞典』は慣用句辞典に属していないが、「顔」の慣用句の用例が豊富かつ充実しているため、採用した。

より広いカテゴリーである「顔」の慣用句の使用状況、品詞別用法、句構成、意味用法を学習者に一層理解させることを研究目的とする。

## 2. 先行研究

「顔」の慣用句の研究は、日本人だけではなく、韓国、中国、台湾などの外国人によってもされており、二言語における「顔」の慣用句の対照研究（林 八竜 2002、アルモーメン アブドーラ 2010）や、意味拡張（有菌智美 2006）、日華辞典・日漢辞典における「顔」による慣用句（頼錦雀 2015）などの先行研究が見られる。

韓国の林（2002）は日韓両国語の「顔」の慣用句を「概念との関わり」「感情との関わり」の2つの観点に分けて論じる。前者は「体面・面目」「知名・親交の範囲の程度」「態度や立場」「人そのものの登場・出現」に、後者は「嬉しさ」「悲しさ・心配」「緊張感」「恥ずかしさ」「驚きや恐怖感」に下位分類して比較した。考察の結果、概念との関わりに関して、「顔」を用いての慣用句表現は、日・韓両国語に共通していて、表現の類似性が高く（「顔/얼굴」55%、半分以上の類似率を見せる）、意味の領域においても、それだけ共通点が多い。なお、「顔」による感情の表し方は、主に顔の生理的な具合や状態の変化に対する形容が多く見られる。またその際の感情や心理状態は両国語に共通していて、「驚きや恐怖」「恥ずかしさ」を表す場合が多い。（林 2002）

アルモーメン アブドーラ（2010）は韓国の林（2002）と同じように、「概念的側面との関わり」「情緒的側面との関わり」の2つの観点から日本語の「顔」とアラビア語の「wajh」にまつわる慣用的表現を比較した。両言語で「顔」の慣用表現に関係する概念的・情緒的用法を整理して、表1にまとめる。

表1によると、日本語とアラビア語には概念的側面において対応する用法が4つあり、アラビア語に限って使われる用法が3つ、日本語に限って使用される用法が1つある。そして、情緒的側面にお

いて、二者間で2つの用法が一致しているが、それぞれに限って使われる用法がアラビア語に1つ、日本語に2つ見られる。

表1 日本語とアラビア語における「顔」にまつわる慣用的表現比較

項目	概念的側面との関わり	情緒的側面との関わり — 色の感覚 —
日本語とアラビア語に共通する用法	1. 面目・名誉 2. 人・モノの〈一面〉 3. 代表 4. 人物そのもの	赤 = 恥ずかしさと怒り 青 = 不健康
日本語本語にないアラビアの用法	1. 対抗 2. 全体 3. 死	黄色 = 動揺、不安
アラビア語にない日本語の用法	人脈	白 = 顔が立つ 青 = 驚き、動揺、恐怖

有菌（2006）は、表2が示すように、「顔」を構造、機能、位置、形状という4つの側面から特徴付けて、それぞれの意味拡張を論じる。

表2 構造、機能、位置、形状的側面から見る「顔」の意味拡張

側面別	意味拡張
構造的側面	「化粧」「個性」「（人・モノの性質）注目すべき一側面」
機能的側面	「表情」
位置的側面	「人」「対面」「関係」「人脈」
構造的側面と機能的側面	「代表」—「指標」「看板」—「名誉」
形状的側面	～詳述していない

表2によると、構造的側面は3つ、機能的側面は1つ、位置的側面は4つ、構造的と機能的の双方の側面を有するものは4つの意味拡張がそれぞれある。しかし、形状的側面に基づく意味拡張について有菌は詳述していない。

頼（2015）は自身で採集した「顔」の慣用句53語を『新時代日漢辞典』『永大当代日華辞典』『cacio 日中辞書』の3種の辞典と比較した。調査の結果、3種の辞書に共通して登録されているのは9語、2種の辞書に共通して登録されているのは15語、1種のみに登

録されているのは 11 語で、どれにも登録されていないのが 19 語あった。また、「顔」に関する慣用句を『分類語彙表』（改訂増補版）に照らして意味分類表に整理した。

上述の先行研究は「顔」の慣用句に関して、二言語間の対照研究、意味拡張、多義性、日漢辞典との比較を中心に行っているが、本研究は 7 種の慣用句辞典における「顔」の慣用句に焦点を当てて、各種辞典における「顔」の採録状況、品詞別用法、句構成、意味用法を明らかにしたい。

### 3. 慣用句辞典における「顔」の慣用句の採録状況

本章では、『Weblio 辞典』（2017）、『日本語慣用句辞典』（2005）、『慣用句の辞典』（1994）、『国語慣用句大辞典』（1988）、『国語慣用句大辞典』（1977）、『慣用句の意味と用法』（1982）、『国語慣用句辞典』（1969）における「顔」の慣用句を抽出して、「顔」の採録状況を究明して比較する。

調査した結果、7 種の辞典における「顔」の慣用句には 93 の用例があった。採録状況は高採録率（4 種以上の辞書に採録されている「顔」の慣用句）、低採録率（1 種の辞典のみに採録されている「顔」の慣用句）と集中式（一部の辞典に集中して使用されている「顔」の慣用句）の 3 つのタイプに分けられる。次に各タイプにおける採録状況について陳述する。

#### 3.1 高採録率の「顔」の慣用句

高採録率のタイプに属する用例が 15 見られる。そのうち、動詞慣用句は 13 で、名詞慣用句と形容詞慣用句はそれぞれ 1 の用例がある。そして、7 種の辞典に共通してある「顔」の慣用句は 3 例で、6 種の辞典に共通してあるのは 4 例、さらに、5 種の辞典では 3 例、4 種の辞典では 5 例である。外国人日本語学習者は身体部位詞「顔」が使われる慣用句を学習する際にこれらの高採録率の用例を最優先

で習得するべきであろう。なお、この調査結果は、日本語教育の現場において教師にも学習者にも参考になるデータの1つであると言えよう。以上を表3にまとめる。

表3 7種の辞典における高採録率の「顔」の慣用句

各辞典 慣用句		Weblio 辞典	日本語慣用句 辞典	慣用句の 辞典	慣用句の 意味と 用法	国語慣用句 辞典	国語慣用句大 辞典 (1977)	国語慣用句大 辞典 (1988)
7 種	顔が広い A <sup>3</sup>	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
	顔に泥を塗る V	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
	顔を出す V	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
6 種	顔が立つ V	✓	✓	✓		✓	✓	✓
	顔が立てる V	✓	✓	✓		✓	✓	✓
	顔が潰れる V		✓	✓	✓	✓	✓	✓
	顔から火が出る V	✓	✓	✓	✓		✓	✓
5 種	大きな顔をする V		✓	✓	✓		✓	✓
	顔を汚す V	✓		✓		✓	✓	✓
	顔をあわせる V	✓		✓		✓	✓	✓
4 種	顔を潰す V	✓	✓		✓			✓
	顔が汚れる V	✓				✓	✓	✓
	顔が利く V		✓	✓	✓			✓
	顔が売れる V	✓	✓	✓	✓			
	知らぬ顔の半兵衛 N	✓	✓	✓	✓			

### 3.2 低採録率の「顔」の慣用句

低採録率というのは、1種の辞典にしか採録されていない「顔」の慣用句を指す。調査の結果、このタイプに属する「顔」の慣用句は31あり、5種の辞典で見られた。『Weblio辞典』には11例が、『慣用句の辞典』には10例が、『慣用句の意味と用法』には4例が、『国語慣用句大辞典(1988)』、『国語慣用句辞典』ではともに3例あった。詳しい内容を下記表4にまとめる。

表4によると、『Weblio辞典』の「顔を拵える」は<顔に化粧をする>、『慣用句の辞典』の「顔を直す」は<化粧の崩れを整える>の意味をそれぞれ表す。二者は低採録率に属する慣用句だが、意

<sup>3</sup> Aは形容詞慣用句を、Vは動詞慣用句を、Nは名詞慣用句を表す。

味用法はともに、化粧に関する「顔」の慣用句で、ユニークな用法だと言える。「顔見世<sup>4</sup>の二番目」（『Weblio 辞典』）は〔顔見世狂言の二番目には出演者の多い狂言を出すことから〕＜家族の多いことのたとえ＞で（大辞林第3版）、日本の伝統文化である歌舞伎と関わりがあるので、日本文化への理解を深めるためにこの慣用句を学習するべきであろう。なお、『Weblio 辞典』の「澄ました顔」、『慣用句の辞典』の「浮かぬ顔」「顔をほころばせる」、『慣用句の意味と用法』の「顔を曇らせる」「顔が曇る」、『国語慣用句大辞典』の「むつかしい顔」、『国語慣用句辞典』の「顔をしかめる」「抜からぬ顔をする」は、ともに人間が喜怒哀楽の感情を顔の表情で表す意味用法であり、これらの慣用句も我々人間生活と深くかつ密接な関係を持っていて、よく使われている慣用句である。よって、慣用句辞典における低採録率の「顔」の慣用句が日常生活でも使用率が低いとは限らない。

表 4 7 種辞典における低採録率の「顔」の慣用句

辞典	「顔」の慣用句	数
『Weblio 辞典』 (2017)	顔色を覗う、顔を見せる、顔に出る、顔を振る、顔見世の二番目、顔を売る、顔を拵える、顔を作る、汗顔の至り、澄ました顔、合わせる顔がない	11
『慣用句の辞典』 (1994)	いい顔をしない、浮かぬ顔、顔色を見る、顔が合わせられない、顔を直す、顔をほころばせる、顔を見せる、素顔を見せる、仏の顔も三度、目顔で知らせる	10
『慣用句の意味と用法』 (1982)	顔を利かす、顔を曇らせる、顔が曇る、顔が出る	4
『国語慣用句大辞典』 (1988)	顔の道具、知らず顔に、むつかしい顔、	3
『国語慣用句辞典』 (1969)	顔をしかめる、抜からぬ顔をする、我が物顔	3
5 種合計		31

<sup>4</sup> 顔見せは、歌舞伎で、1年に1回、役者の交代のあと、新規の顔ぶれで行う最初の興行のことである。

### 3.3 集中式の「顔」の慣用句

7種の辞典のうち、『Weblio 辞典』、『日本語慣用句辞典』、『慣用句の辞典』、『慣用句の意味と用法』の4種では「顔」の慣用句の採録状況の一致性が高いことがわかった。そして、『国語慣用句辞典』、『国語慣用句大辞典』（1977）、『国語慣用句大辞典』（1988）の3種は同一の編集者なので、「顔」の慣用句の採録状況に多くの重なりがみられた。便宜上前者の4種をAグループに、後者の3種をBグループとする。

表5 7種の辞典における集中式の「顔」の慣用句

A グループだけで使われている顔の慣用句	B グループだけで使われる顔の慣用句
<p><b>動詞慣用句 (25)</b>            顔色を覗う、顔を作る、顔を直す、顔を拵える、顔を見せる、顔に出る、顔を振る、顔を利かす、顔を曇らせる、顔を売る、顔を揃える、顔を貸す、いい顔をしない、顔色を見る、顔を繋ぐ、顔をほころばせる、顔を見せる、顔が曇る、顔が売れる、顔が揃う、顔が合わせない、顔に書いてある、顔に紅葉を散らす、顔向けができない、目顔で知らせる</p> <p><b>名詞慣用句 (9)</b>            浮かぬ顔、顔色無し、顔見世の二番目、知らぬ顔の半兵衛、そ知らぬ顔、涼しい顔、澄ました顔、何食わぬ顔、仏の顔も三度</p> <p><b>形容詞慣用句 (1)</b>            合わせる顔がない</p>	<p><b>動詞慣用句 (26)</b>            顔を赤くする、顔が赤くなる、顔が赤らむ、顔が上げられない、顔がしかむ、顔をしかめる、顔に免ずる、顔持ちが悪い、顔をあげる、顔を隠す、顔を飾る、顔をくしゃくしゃにする、顔をくつつける、顔を背ける、顔をのぞかせる、顔を膨らす、顔を向ける、さえない顔をする、死に子顔よかりき、知らず顔を作る、涼しい顔をする、世間に顔が出せない、抜からぬ顔をする、見慣れ顔に作る、物のあわれも知り顔を作る、顔を貸す</p> <p><b>名詞慣用句 (11)</b>            顔の道具、借りる時の地蔵顔返す時の閻魔顔、聞かぬ顔、渋い顔、月の顔、苦い顔、抜からぬ顔、ひねた顔、むつかしい顔、我が物顔、しらん顔</p> <p><b>形容詞慣用句 (1)</b>            顔が赤い</p>
合計：35	合計：38

両グループにそれぞれ集中的に採録されている表現がある。例えば、「顔色を覗う、顔を作る、顔を直す、顔を拵える」などの計35の慣用句はAグループにしか採録されていない。それに対して、「顔を赤くする、顔が赤くなる、顔が赤らむ、顔が上げられない」など

の計 39 の慣用句は B グループだけに採録されている。

それぞれのグループの数は 35 と 38 で、品詞別用法から見ると、A グループに属する 35 句には、動詞慣用句 (25)、名詞慣用句 (9)、形容詞慣用句 (1) が見られた。動詞数は名詞数の約 3 倍で、形容詞句数は 1 例しかない。B グループの 38 句の分布状況は A グループと類似しており、動詞句と名詞句の数も一位、二位の順位で、動詞句数は名詞句の約 2.5 倍で、形容詞の句数も 1 例しかない。以上を表 5 に整理する。

両グループでおのおの限定して採録されている「顔」の慣用句の差異は次の 2 点が起因していると思われる。1 つは編集の年代で、A グループのほとんどは 1990 年代以後で、B グループは 1990 年代以前である。もう 1 つは B グループの編集者が同一人物であることだ。

#### 4. 「顔」の慣用句の品詞別用法、句構成、意味用法

##### 4.1 「顔」の慣用句の品詞別用法

品詞別用法から慣用句を分析すると、本論で、7 種の辞典から採集した「顔」の慣用句は 93 ある。これらの用例数を品詞別に分類すると、動詞慣用句、名詞慣用句、形容詞慣用句<sup>5</sup>が見られる。この中で、動詞慣用句が最多で、71.43%にも達しており、名詞慣用句はそれに続き 25.51%で、形容詞慣用句は最少で、わずか 3.06%しかない。このように、「顔」の慣用句の用例数は、動詞>名詞>形容詞の順序で、宮地 (1982) の調査結果と一致している。では、各品詞別用法の句構成はどのようになっているか。引き続き明らかにしていきたい。

##### 4.2 「顔」の慣用句の句構成

###### 4.2.1 「顔」の動詞慣用句の句構成

本調査の統計で、「顔」の動詞慣用句の句構成には、「N ヲ V」「N

---

<sup>5</sup> 動詞慣用句は「名詞+格助詞+動詞」、名詞慣用句は「名詞で終わる慣用句」、形容詞慣用句は「名詞+ガ+形容詞」とする。

ガ V」「Nニ V」「Nカラ Nガ V」「Nニ Nを V」「Nヲ ADVニ V」「Nニ Nガ Vない」「Nモ Nヲ V」「Nデ V」の 9つの形式が見られた。

「Nヲ V」は 43 例あり、「Nガ V」は 15 例、「Nニ V」のは 4 例あった。9つの形式があるが、主に「Nヲ V」「Nガ V」「Nニ V」の 3つの形式に集中していて、他の形式の用例は 1つか 2つしかない。以上を表 6 にまとめる。

表 6 「顔」の慣用句における動詞慣用句の句構成

NO	句構成の形式	慣用句の用例
1	Nヲ V	顔を顰める、顔を立てる、顔を汚す、顔を利かす、顔を作る、顔を直す、顔を拵える、顔を振る、顔を背ける、顔を見せる、顔を合わせる、顔を覗かせる、顔を曇らせる、いい顔をしない……など
2	Nガ V	顔が赤くなる、顔が赤らむ、顔がしかむ、顔が立つ、顔が潰れる、顔があげられない、顔向けができない、顔が合わせられない……など
3	Nニ V	顔に出る、顔に免ずる、見慣れ顔に作る、顔に書いてある
4	Nからガ V	顔から火が出る
5	Nニ Nヲ V	顔に泥を塗る、顔に紅葉を散らす
6	Nヲ ADVニ V	顔をくしゃくしゃにする
7	Nニ Nガ Vない	世間に顔が出せない
8	Nモ Nヲ V	物のあわれも知り顔を作る
9	Nで V	目顔で知らせる

調査データによると、「顔」の動詞慣用句は、「Nヲ N」の形式が最多で、全体の 6 割以上にも達する。また、肯定の形だけではなく、使役形（顔を覗かせる、顔を曇らせる、顔をほころばせる……）、否定形（いい顔をしない）もある。

「Nガ V」の形式は、「Nヲ N」に続いて多くあり、「顔」の動詞慣用句数の 2 割以上を占める。肯定形（顔が赤くなる、顔が赤らむ……）の他に、否定形（顔が上げられない、合わせる顔合がない、顔向けができない、顔が合わせられない）もいくつか見られる。

「Nニ V」の形式は「顔」の動詞慣用句において、採録数が 3 番目に多いが、表 6 に示すように用例数は 4 つしかない。

他の 6 つの形式は用例数がともに極めて少ない。「森田」（1985）

の動詞慣用句と本稿の「顔」の動詞慣用句はともに採録されている句構成は、「NヲV」「NガV」「NニV」「NニNヲV」の4つの形式である。そして、森田（1985）の考察では、動詞慣用句の数は「NヲV」>「NニV」>「NがV」の順序であるが、本研究において「顔」の動詞慣用句数は「NヲV」>「NがV」>「NニV」である。「NヲV」の形式は、動詞慣用句でも「顔」の動詞慣用句でも採録数が最多であることは一致している。それに対して「NがV」と「NニV」は二者に相違点が見られた。

なお、「顔」の動詞慣用句には、自動詞と他動詞がともに使用される表現が見られる。それらには「顔がしかむ/顔をしかめる」「顔が立つ/顔を立てる」「顔が潰れる/顔を潰す」「顔が汚れる/顔を汚す」「顔が効く/顔を利かす」「顔が曇る/顔を曇らせる」「顔を出す/顔が出る」の計7組がある。

#### 4.2.2 「顔」の名詞慣用句の句構成

「顔」の名詞慣用句は動詞慣用句ほど多くないが、用例数は全体の25%以上に達する。分析した結果、その句構成には「V+N」「NノN」「A+N」「AV+N」「N」「NモN」の形式が見られる。句構成の形は6つあるが、用例数はほとんど「V+N」「NノN」「A+N」の3つに集中する。ほかの「AV+N」「N」「NモN」形式の用例は1つか2つしかない。以上を表7に示す。

表7によると「V+N」の形式の用例数をもっとも多く見られ、その形はさらに「動詞の否定形式+顔」（聞かぬ顔、抜からぬ顔、知らず顔など）と「動詞の過去形+顔」（ひねた顔、澄ました顔）の2つのタイプに分けられる。なお、前者は動詞の否定形と助動詞「ぬ、ず、ない、らん」と組み合わせて使用されている。

「NノN」の形について「顔」は「ノ」の前（顔の道具）にも、「ノ」の後ろ（月の顔）にも使われている。また、複合語の形である「汗顔」（極めて恥ずかしく感ずること）「地藏顔」（ニコニコした顔）

「閻魔顔」（恐ろしい顔）も見られて、連体修飾語である「知らぬ顔」（知らぬふり）も使用される。「顔見世<sup>6</sup>の二番目」は日本の文化である歌舞伎と深い関係を持っていて、全体の意味は家族が多いたとえである。

表 7 「顔」の慣用句における名詞慣用句の句構成

NO	句構成の形式	慣用句の用例
1	V+N	聞かぬ顔、抜からぬ顔、そ知らぬ顔、何食わぬ顔、知らず顔、冴えない顔、知らん顔 ひねた顔、澄ました顔
2	N+ノ+N	顔の道具、月の顔、汗顔の至り、顔見世の二番目、知らぬ顔の半兵衛、借りる時の地藏顔返す時の閻魔顔
3	A+N	渋い顔、苦い顔、むつかしい顔、涼しい顔、
4	AV+N	大きな顔、大きな顔で
5	N	我が物顔
6	NモN	仏の顔も三度

「A+N」のは味覚形容詞「渋い、苦い」と難易度の形容詞「むつかしい」が「顔」と結びつき、抽象的な表情を表す。また、寒暖の「涼しい」は「顔」と結びつくと自分が関係していながら、何も知らないといった顔つきで入る様子、態度を表す。

「AV+N」（「大きな顔」「大きな顔で」）「N」（「我が物顔」）、「NモN」（「仏の顔も三度」）の形はそれぞれ2句か1句しかない。この3形式は名詞慣用句において用例が少ないことがわかった。

#### 4.2.3 「顔」の形容詞慣用句の句構成

西尾（1985）が述べるように、形容詞慣用句（形容詞が句の中心になっているもの）の組み立ては、動詞慣用句などに比べて、ずっと単純なものが多いと言えるだろう。形容詞慣用句には、「が」以

<sup>6</sup> 「顔見世」の意味は（1）人前に出ること。（2）遊女や芸者などが、初めて勤めに出るとき、揚屋や料亭などに挨拶して回ること。（3）歌舞伎年中行事の一、江戸時代、年一度の各座の俳優の交代のあと、新規の顔ぶれで行う最初の興行の3つである。（goo 辞書）

外の助詞を伴う名詞句を含むものは皆無に等しい。

「顔」の形容詞慣用句は動詞慣用句および名詞慣用句に比べてずっと少なく、7種の辞典を調査した結果、「顔が広い、顔が赤い、顔持ちが悪い、合わせる顔がない」の4例しかなかった。そして、句構成はすべて「NガA」で「知名度・交際」「恥或は怒りの容貌」「様子・態度」「名誉・面目」の意味用法があった。

#### 4.2.4 「顔」の慣用句の句構成のまとめ

「顔」の動詞慣用句には、9形式あるが、用例数は殆ど「NヲV、NガV、NニV」の3形式に集中していて、特に「NヲV」がもっとも多く使われている。

「顔」の名詞慣用句の句構成には6形式が見られ、用例数は79.16%で「V+N、NノN、A+N」の形式を中心に使用されている。

「顔」の名詞慣用句と「顔」の動詞慣用句の句構成は類似しており、前者は約8割、後者は約9割(89.86%)の用例が主に3つの形式で使用される。

「顔」の形容詞慣用句の句構成は、「NガA」の形でしかなく、用例数は僅か4である。

### 4.3 「顔」の慣用句の意味用法

7種の慣用句辞典に93の「顔」の慣用句があり、「顔の様子・状態(顔形・容貌、表情・顔付、態度・様子)、化粧、出席・訪問、恥、面目・名誉、知名度(人脈)、人、不承知、家族の多いこと、人を正視する、会う・対戦する、姿を隠す、姿を見せる、両顔をくつつける、器量がよいもの」などの意味用法があった。そこで、次に各々の「顔」の慣用句の意味用法を分析する。

#### 4.3.1 顔の様子・状態：顔形・容貌、表情・顔付、様子・態度

一般的に、人を識別する場合、生まれつきの容貌・顔付から判断

する。そして、われわれ人間は喜、怒、哀、楽の精神状態を視覚的に捉えやすい身体部位「顔」の表情で感情を理解している。また、他人に接する時、内面感情は顔の様子或いは身振りに転換して振る舞っている。よって、「顔」の慣用句において、「顔の様子・状態」の用例数がもっとも多くあり、代表的な意味用法であると言えよう。

一般的な国語辞典における顔の様子・状態には、(イ) 顔形・容貌 (ロ) 表情・顔付 (ハ) 様子・態度の3つの下位分類があり、本節はそれに基づき、「顔」の慣用句と意味用法を陳述する。

### (イ) 顔形・容貌：

<顔形・容貌>に関する「顔」の慣用句には、「顔が赤い、月の顔、ひねた顔、顔がつややかだ、顔が赤くなる」があり、「顔」が形容詞「赤い」、動詞「赤くなる」、「ひねた」（連用形）と結びついて、人間の赤ら顔、ませた顔を表現する。なお、名詞は「月」のみで、自然物（「月の顔」）の容姿を表す慣用句として使用される。以上を表8にまとめる。

表8 「顔形・容貌」の意味用法を表す「顔」の慣用句

意味用法	顔の慣用句	慣用句の意味
顔形・容貌	顔が赤い ◎ <sup>7</sup>	1. 赤ら顔である。 2. お酒などを飲んで赤い顔をしている。 3. 恥ずかしくて赤い顔をしている。
	月の顔	月の面。月の姿
	ひねた顔	ひねている顔。年を取って老人くさくなった顔。ませた顔
	顔が赤くなる◎	1. 酒を飲んだりして顔が赤味を帯びてくる。 2. 一生懸命に事をして顔が赤くなる。 3. 興奮して顔が赤くなる。 4. 恥ずかしくなったりして、顔が赤くなる。

### (ロ) 表情・顔付

「表情・顔付」に属する「顔」の慣用句は、「浮かぬ顔、顔がしかむ、顔を顰める、顔を曇らせる、顔が曇る、顔持ちが悪い、さえ

<sup>7</sup> 一つの慣用句が複数以上の意味用法を持っているものを◎で示す。

ない顔をする、苦い顔、顔を作る、むつかしい顔、我が物顔、顔をほころばせる、抜からぬ顔、抜からぬ顔をする、顔色を覗う、顔色を見る、顔に出る、見慣れた顔に作る、物あわれも知り顔を作る、顔に書いてある、目顔で知らせる」があり、「顔の様子・状態」（3つの下位分類がある）において用例数をもっとも多い。

表9 「表情・顔付」意味用法を表す「顔」の慣用句

意味用法	「顔」の慣用句	慣用句の意味 <sup>8</sup>	評価性
表情・顔付	浮かぬ顔	心配や釈然としないことなどがあって、晴れやかでない顔付き、冴えない表情。	—
	顔がしかむ	顔がしわがよる。顔が顰め面である。	—
	顔を顰める	苦痛や不快のために、眉のあたりに皺を寄せる。	—
	顔を曇らせる	不安や悩みなどで暗い表情になる。悲しそうな顔付きをする	—
	顔が曇る	気落ちした様子の暗い表情になる。	—
	顔持ちが悪い	顔のぐあい、顔の様子、顔付き、顔色が良くない。	—
	さえない顔をする	暗い顔をする。	—
	苦い顔	不愉快な顔。不満足な顔付き。	—
	顔を作る◎	無理にそのような表情をする。	—
	むつかしい顔◎	なかなかきげんの取りにくい様子の顔。	—
	我が物顔◎	自分の所有物である といった顔つきや態度。	—
	顔をほころばせる	嬉しさに思わずにっこりする。	+
	抜からぬ顔	抜け目のない顔をする。油断の無い顔	+
	抜からぬ顔をする	付きをする。	
	顔色を覗う	それとなく相手の表情を見て、機嫌の良し悪し、体の調子を察する。	△
	顔色を見る	相手の表情を見て、その思いを推し測る。	△
	顔に出る	何も言わなくても、その心や体調が表情に表れる。	△
	見慣れた顔に作る	見なれた顔に作る。前々から夫婦などの関係にあるという顔をする。	△
	物あわれも知り顔を作る◎	物事の情趣を知っている、そういう顔をする。わけのわかったような顔をする。	△
	顔に書いてある	人の気持ちや思いが表情にありありと現れている。	△
目顔で知らせる	目を動かさずなどして、表情でそれとなく相手に何かを知らせる。	△	

「心配、皺がよる、苦痛や不快、不安や悩み、暗い表情、暗い顔、

<sup>8</sup> 慣用句の意味は7種の辞典、『ポケット慣用句・故事ことわざ辞典』（2016）を参考にした。

気落ちた、不愉快、顔色がよくない、不満足、暗い顔、無理にそのような表情をする」など、心理面から見れば快くない、楽しくない、自分の所有物である顔付、機嫌の取りにくい、不本意であるマイナス評価を持っている表現が多く見られる。無論、プラス評価を表す「顔ほころばせる（喜び）、抜からぬ顔、抜からぬ顔をする（油断のない顔付）」の慣用句もあるが、両者の数には雲泥の差（11：2）があることがわかった。なお、マイナス評価もプラス評価もない慣用句「顔色を覗う」（機嫌の良し悪しを察する）、「顔に出る」（その心が表情に表れる）、「見なれた顔に作る」、「物あわれも知り顔を作る」（わけの分かった顔をする）、「顔に書いてある」（人の気持ちが表情に現れる）、「目顔で知らせる」（表情で相手に何かを知らせる）は「△」で記す。

考察の結果、「顔の様子・状態：表情・顔付」に属する「顔」の慣用句の意味用法は、マイナス評価性が多いことがわかった。それぞれ詳しい意味と慣用句は表9にまとめる。

#### （ハ） 態度・様子

「態度・様子」の意味用法である「顔」の慣用句は、「表情・顔付」に続いて多くあり、例えば「大きな顔、大きな顔で、大きな顔をする、聞かぬ顔、渋い顔、知らず顔に、知らず顔を作る、知らん顔、そ知らぬ顔、知らぬ顔の半兵衛、いい顔をしない、涼しい顔をする、涼しい顔、澄ました顔、何食わぬ顔、顔を膨らす、顔をくしゃくしゃにする」が見られる。

意味用法は「威張った態度や、聞こえない振り、不満足・不快の様子、知らない振り、わざと知らない振り、好意的な態度を示さない、自分が関係しながら何も知らない顔付でいる様子、機嫌の取りにくい、自分に関わりがないといった平然とする様子、不満である様子、顔の形を崩す」などがある。これらの慣用句は「～顔」の形がよく使われていて、はじめは「表情・顔付」に属するが、時間的

隣接性に基づくメトニミー<sup>9</sup>によって、「態度・様子」に変換される。そして、有菌（2008）の調査によると、「聞かぬ顔、渋い顔、知らず顔に、そ知らぬ顔、いい顔をしない、涼しい顔、澄ました顔、何食わぬ顔」における「顔」は「表情」への言い換えが可能である。この部分の意味形成は心理→表情→態度の経過で表出されている。

表 10 「態度・様子」意味用法を表す「顔」の慣用句

意味用法	「顔」の慣用句	慣用句の意味	評価性
態度・様子	大きな顔、大きな顔で、大きな顔をする	威張った態度、悪いことをしながら平然とした様子をするようである。	－
	聞かぬ顔	聞こえない振り、様子。	－
	渋い顔◎	不満足・不快の様子。	－
	知らず顔に◎	知らない様子・振り。	－
	知らず顔を作る◎	わざと知らない顔をする。	－
	知らん顔◎	知っていながら、知らない顔・振りをする。	－
	そ知らぬ顔◎	知らん顔、知っているのに知らない振りをする。	－
	知らぬ顔の半兵衛◎	知っていながら、わざと全く知らない振りをしている様子。(半兵衛は擬人化した言い方)	－
	いい顔をしない◎	協力的な、また、好意的な態度を示さない	－
	涼しい顔をする	さっぱりした顔をする。	－
	涼しい顔	自分が関係しながら、何も知らないといった顔つきでいる様子。	－
	澄ました顔	自分にはかかわりがないといった、平然とした顔付をしている様子。平気な様子	－
	何食わぬ顔	自分は全く関知しないことだといったふりをして、平然と何かをする様子。	－
	顔を膨らす	怒る、機嫌が悪い、拗ねる、不満である様子・たとえ。	－
顔をくしゃくしゃにする	喜んだり悲しんだりして顔の形を崩す様子・たとえである。	－+	

前述した「表情・顔付」の項目と同じように、この「態度・様子」にはマイナス評価用法もある。評価性の層面から見れば、ほとんどが否定的イメージを表す。特に意識的に精神状態の不快を外的な顔の表情で表す。プラス評価性を持っている「顔」の慣用句もあるが、

<sup>9</sup> メトニミー：二つの物事の外界における隣接性、あるいは二つの物事・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の物事・概念を表す形式を用いて、他方の物事・概念を表すという比喩。（靱山（2002）『認知意味論のしくみ』）

「顔をくしゃくしゃにする（喜んだり悲しんだりして顔の形を崩す様子）」しかない。なお、「態度・様子」を表す慣用句にもプラス評価性とマイナス評価性がある。以上を表 10 にまとめる。

### 4.3.2 化粧

「化粧」に関する「顔」の慣用句は「顔を作る、顔を飾る、顔を拵える、顔を直す」の 4 句であり、前 3 句の意味はすべて化粧をすることで、第 4 句は崩れた化粧を直すことを意味する。

有菌（2008）によると、「顔を拵える」は「顔」が＜顔（の構造）＞を、「拵える」が＜手を加えて作り上げる＞ことを表し、句全体で＜顔に手を加えて作り上げる＞（＝＜化粧する＞）ことを意味しており、「顔」自体が＜化粧＞を表していない。「顔を直す」の「顔」は化粧と言い換えることができ、「顔」自体に＜化粧＞の意味が認められる。目、鼻、口などの部位やそれによって構成された顔全体に施す＜化粧＞は、その＜顔＞と空間において隣接しているため、メトニミーによって、＜顔＞を表す形式で＜化粧＞の意味を表しているのである。

つまり、表 11 が示すように、この 4 つの「顔」の慣用句の意味は「化粧」に関連し、慣用句の中の「顔」はそれぞれ「顔の構造」（「顔を作る」「顔を拵える」「顔を飾る」）、「化粧」（「顔を直す」）を表現する。

表 11 「化粧」意味用法を表す「顔」の慣用句

意味用法	「顔」の慣用句	慣用句の意味	顔の意味
化粧	顔を作る◎	女性が化粧をする。	顔の構造
	顔を拵える	女性が化粧する。	顔の構造
	顔を飾る	顔を綺麗に見えるようにする。顔に手を加える。	顔の構造
	顔を直す	崩れた化粧を直す。	化粧

### 4.3.3 恥

「恥」の意味を表す「顔」の慣用句は、「顔を赤くする、顔が赤くなる、顔が赤らむ、顔が上げられない、顔から火が出る、顔を背ける、世間に顔が出せない、顔に紅葉を散らす」がある。これらは身体部位詞「顔」が色である「赤」や「火」と結びついている慣用句である。「火」は高温で赤熱したもので、「赤」は暖色に属し、見る者に暖かい感じを与える色（広辞苑 2009）で、二者ともに高温或は暖かさを意味する。我々人間は恥をかくときに、内心から顔まで熱さを伝達し、顔が熱さで自然に赤くなる。よって、「火」の高温と「赤」の暖かい感じを用いて、「顔」と合わせて、人間の恥ずかしさを表す。

「顔が上げられない」「顔を背ける」「世間に顔が出せない」は方向性の概念を使って、正視することができない、人に顔を見られないようにする、人前に出られないというしぐさで、「恥」を意味する。

表 12 「恥」意味用法を表す「顔」の慣用句

意味用法	「顔」の慣用句	慣用句の意味
恥	顔を赤くする	困ってぼっとする、恥ずかしがる様子。
	顔が赤くなる◎	1. 酒を飲んだりして顔が赤味を帯びてくる。 2. 一生懸命に事をして顔が赤くなる。 3. 興奮して顔が赤くなる。 4. 恥ずかしくなったりして、顔が赤くなる。
	顔が赤らむ	恥ずかしくなるたとえ。
	顔が上げられない◎	1. 何か生理的事情などで、顔を上げることができない。 2. 心理的な理由で、顔を上げることができない。人を正視することができない。
	顔から火が出る	顔が真っ赤になる意で、ひどく恥ずかしい思いをする様子。
	顔を背ける	恥ずかしかったりしてひとに顔を見られないようにするしぐさ。
	世間に顔が出せない	不具などになって、人前に出られない、大恥をかく、面目を失うなどのたとえ。
	顔に紅葉を散らす◎	女性が恥ずかしがって、顔を赤らめ、かえって色気を感じさせる様子。

「顔」に関する慣用句には日本の季節と関連付けられているもの

もある。日本では、「春は桜、夏は緑、秋は紅葉、冬は雪」と表され、4つの季節がはっきりしている。紅葉は秋の代表的な風物であり、「顔に紅葉を散らす」の「紅葉」は「赤」を比喻し、顔の一面に紅葉を散らして、真っ赤な顔かつ恥ずかしい意味を表現する。よって、この慣用句は日本の季節感と深く関わっている。以上を表12にまとめる。

#### 4.3.4 名誉・面目

各国語辞典の解釈において、「よく知られている事によって得られた信用や評判」は体面、名誉・面目、知名度、影響力に分けられる。そこで、次に「体面、名誉・面目」を「名誉・面目」に、「知名度、影響力」を「知名度」に分類して陳述する。

「名誉・面目」を表す「顔」の慣用句には、「顔が立つ、顔を立てる、顔が潰れる、顔を潰す、顔が汚れる、顔を汚す、合せる顔がない、顔に免ずる、世間に顔が出せない、顔が合わせられない」がある。これらには、3組（立つ/立てる、潰れる/潰す、汚れる/汚す）の自他動詞が使われており、「面目が保たれる、名誉をを重んじる、面目が失われる、体面を損なう、面目を失う、面目を失わせる」という意味を表す。

田中（2005）は「顔を立てる・潰す」という慣用表現における＜顔＞概念は、社会通念上一定の名誉や権利を伴うとされる＜立場＞として、より特定のにはその名誉や権利そのものとして説明できると述べている。なお、日本語社会においては、＜立場＞重視の価値観が背景にあり、「顔」は＜人脈＞の概念と結び付いているとも田中（2005）は述べている。「顔を立てる、顔を潰す」の慣用句中の「顔」は、＜人脈＞と深く関わっていることがわかる。

そして、「合せる顔がない」「世間に顔が出せない」或いは「顔が合わせられない」「顔向けができない」はすべて、人の前に出られない気持ちを意味し、面目を失っているたとえである。

人間の顔は体において重要な部位を占めていて、「泥」はきたないものを表し、「顔に泥を塗る」は名誉を傷つけて、侮辱することを意味する。

名誉を傷つけたり、面目が失われたりすることも「恥」と関連付けられている。つまり、これらの慣用句には「恥」の意味も含まれているのである。以上を表 13 にまとめる。

表 13 「名誉・面目」を表す「顔」の慣用句

意味 用法	「顔」の慣用句	慣用句の意味
名誉 ・ 面目	顔が立つ	その人の評価が高められるようなことがあって、 <b>面目</b> が保たれる。
	顔を立てる	その人の名誉を重んじ、 <b>面目</b> が保たれよようにしてやる。
	顔が潰れる	その人の評価を落とすような結果になり、 <b>面目</b> が失われる。
	顔を潰す	相手に恥をかかせる、相手の <b>体面</b> を損なうようなことをする。
	顔が汚れる◎	1. 顔が汚くなる。 2. <b>面目</b> を失うたとえ。
	顔を汚す◎	恥をかかせる。 <b>面目</b> を失わせる。
	合わせる顔がない◎	面目なく、その人の前に出られない気持ちだ。
	顔に泥を塗る◎	そのひとが何かをした結果、相手の <b>名誉</b> を傷けたり恥をかかせたりする。
	顔に免ずる	面目のために許す。面目を保つために許す。
	世間に顔が出せない◎	不具などになって、人前に出られない、大恥をかく、 <b>面目</b> を失うなどのたとえ。
	顔が合わせられない	<b>面目</b> を失うようなことをして、その人に会うのが気まずい様子。
顔向けができない◎	<b>面目</b> を失って、人に顔をあわせることができないほど恥じ入る様子。	

#### 4.3.5 知名度

「知名度」を表す「顔」の慣用句には、「顔が利く、顔を利かす、顔が広い、顔が売れる、顔を売る」がある。前述と同じように、「顔」が2組の自他動詞（利く/利かす、売れる/売る）と合わせて使われ、「名が知られていて、影響力を使って利益を得ること、社会で力が発揮できる存在になる、世間に広く知られる」という意味を表す。

なお、「顔が広い」は多方面の人と付き合うことで、知り合いが多く交際範囲も広いという慣用句である。「顔」が「交際範囲」「人

脈」（影響力）という概念を表しているのである。「広い」は物事の範囲が大きいことで、すみずみまで行き渡っている（広辞苑 2008）ことである。

表 14 が示すように、これらの慣用句には「名が知られる」「知り合いが多い」或いは「広く知られる」という「知名度」を表す。

表 14 「知名度」を表す「顔」の慣用句

意味 用法	「顔」の慣用句	慣用句の意味
知名度 (人脈)	顔が利く	名が知られていて、何かと無理を通すことができる。
	顔を利かす	自分の持っている影響力を使って、利益を得ること。
	顔が広い	交際範囲が広く、知り合いが多い様子。
	顔が売れる	広く名が知られ、その会社で力が発揮できる存在になる。
	顔を売る	世間に広く知られようとする。

#### 4.3.6 出席・訪問

「出席・訪問」に関する「顔」の慣用句には、「顔を見せる、顔を出す、顔が出る、顔が揃う、顔を揃える、顔を貸す、顔を繋ぐ」がある。前述した「名誉・面目」、「知名度」の項目と同じように、自他動詞（2組、出す/出る、揃う/揃える）とともに構成されている。これらには「人の出現や、人の家を訪ねる、訪問する、顔を見せる、人前に出る、隠れていたものが現れ出る、会合に出席したりする、集まりに出席する」など、「出席」あるいは「訪問」を中心にする意味用法が見られる。

「顔が揃う」は「出席すべき人が、全員その場に出てくる」ことを意味する。有蘭（2008）は身体の上方の前面に位置する〈顔〉は、身体において非常に顕著であり、その人物自体（〈人〉）を表すことができるとし、これは部分によって全体を表すメトニミーに基づいて拡張した意味だと述べている。つまり、この慣用句で「顔」は「人」を表しているのである。以上を表 15 にまとめる。

表 15 「出席・訪問」を表す「顔」の慣用句

意味用法	「顔」の慣用句	慣用句の意味
出席・訪問 / 人	顔を見せる	人そのものの出現、出席、訪ねる
	顔を出す	あいさつなどに人の家を訪ねたり、礼儀的に会合に出たりする。顔を見せる、人前に出る。
	顔が出る	訪問する。会合に出席する。隠れていたものが現れ出る。
	顔が揃う	出席すべき人が、全員その場に出てくる。(その場に來ているべき人が、すべて集まる。)
	顔を揃える	
	顔を貸す	是非にと頼まれて、人に会ったり会合に出席したりする。
顔を繋ぐ	時折はあいさつに出向いたり集まりに出席したりして、その人や組織などの縁が切れないようにする。	

#### 4.3.7 他の意味用法

以上調査した「顔」の慣用句の意味用法には、「顔の様子・状態：顔形・容貌、表情・顔付、様子・態度」「化粧」「恥」「名誉・面目」「出席・訪問」があり、各用法の用例数が多数（少なくとも4つ以上）ある。

本節では、用例数が少数の「顔」の慣用句を「他の意味用法」として分析する。これらの慣用句には「顔を振る、顔見世の二番目、顔を上げる、顔を合せる、顔を向ける、顔を隠す、顔を覗かせる、顔をくっつける、死にし子顔よかりき、仏の顔も三度、借りる時の地藏顔返す時の閻魔顔」がある。そして、「不承知、家族の多いことのとえ、人を正視する、会う・対戦する、姿を隠す、ちょっと姿を見せる、顔をつけて合せる、死ぬ子は眉目好し、どんな寛大な人でもひどいことを何度もされたら怒るものだということ、金を借りる時は優しいにこにこ顔をするが、返すときには不機嫌な顔をする」という意味用法がある。

「顔を振る」は首を横に振る動作で、否定或いは不承知の意志を意味し、「顔を上げる、顔を合せる、顔を向ける、顔を隠す、顔を覗かせる」にはそれぞれ視覚動詞が使われている。

「顔見世の二番目」は日本伝統文化の一つである江戸歌舞伎と関係がある。顔見世狂言二番目には出演者の多い狂言を演じることから家族の多いことのたとえとなっており、日本文化と深く関わっている慣用句だと言える。

なお、「仏の顔も三度」「借りる時の地蔵顔返す時の閻魔顔」は、『国語慣用句辞典』『国語慣用句大辞典』においては慣用句として収められているが、『ポケット版 慣用句・故事ことわざ辞典』(2016) (以下はポケット辞典) ではことわざの部分に編集されている。

表 16 他の意味用法を表す「顔」の慣用句

意味用法	「顔」の慣用句	慣用句の意味
不承知	顔を振る	不承知の意を表す動作。
家族の多いことのたとえ	顔見世の二番目	(江戸歌舞伎の顔見世狂言の二番目は世話場で、雪降りや町家の場面が多く多数の人物が出入りするところから)雪降りの情景や、町家のごだごだしたさまにいう。『日本国語大辞典』第二版(2001)
人を正視する	顔を上げる	顔を上のほうに向ける。相手の顔を見上げる。
会う・対戦する	顔を合わせる	(会う意から)競技などで、対戦相手となる。また、映画・演劇などで競演する。
	顔を向ける	そのほうへ顔をやる。そのほうを見る。そのほうをめざす。顔を合せる。
姿を隠す	顔を隠す	顔を見ないようにする。顔を見られないようにする。姿を隠す。
ちょっと姿を見せる	顔を覗かせる	顔を覗くようにする。ちょっと姿を見せる。ちらちらと見るたとえ。
両顔をくっつける	顔をくっつける	顔に顔をつけて合せる。
器量が良いもの	死にし子顔よかりき	死ぬ子は眉目好し。死んだ子は、顔がよかった。
諺	仏の顔も三度	いかに仏のように温厚なひとでも、無法を繰り返し加えられれば、しまいには怒り出すということ。
諺	借りる時の地蔵顔返す時の閻魔顔	金銭や物を借りるときは、地蔵さまのようににこにこして喜んでいた人が返済する時には閻魔様のように不機嫌で怖い顔をする。

以上のように、用例数が少ない「顔」の慣用句には、動作や視覚

動詞と結びついているもの（顔を振る、顔を上げる、顔を合せる、顔を隠す、顔を覗かせる、顔をくつつける）、日本文化に関連付けられているもの（顔見世の二番目）、諺と深く関わっているもの（仏の顔も三度、借りる時の地蔵顔返す時の閻魔顔））が見られる。以上を表 16 にまとめる。

#### 4.3.8 「顔」の慣用句の意味分類のまとめ

4.3.2 から 4.3.7 まで、「顔」の慣用句の意味用法を 7 種の慣用句辞典を用いて分析した。

- (1)、意味用法には、顔の様子・状態（顔形・容貌、表情・顔付、様子・態度）、化粧、恥、名誉・面目、知名度、出席・訪問/人（以上は用例多数）、不承知、家族の多いたとえ、人を正視する、会う・対戦する、姿を隠す/見せる、両顔をくつつける、器量がよい（以上は用例少数）がある。
- (2)、顔の様子・状態（顔形・容貌、表情・顔付、様子・態度）：  
「表情・顔付」の用例数がもっとも多く、「様子・態度」と同じように意味用法にはマイナス評価性が多く見られる。
- (3)、「名誉・面目」（顔/立つ・立てる、潰れる・潰す、汚れる・汚す）「知名度」（顔/利く・利かす、売れる・売る）「出席・訪問」（顔/出る・出す、揃う・揃える）の「顔」の慣用句においては、自他動詞が使用される。
- (4)、「顔に紅葉を散らす」（恥の意味用法）、「顔見世の二番目」（他の意味用法）はそれぞれ日本の季節感、日本伝統文化と関連付けられている。
- (5)、「顔」の慣用句では、「顔」は表情、化粧への言い換えが可能である、一方「名誉・面目」「知名度」「出席・訪問」では「顔」は「立場」「人脈」「人」の概念を表すことができる。
- (6)、「仏の顔も三度」「借りる時の地蔵顔返す時の閻魔顔」はこと

わざに分類される場合がある。

## 5. おわりに

倉持ら（1994）は慣用句を適切に使うことによって、表現が豊かになり、しかも生き生きとし、また、慣用句をよく知っていれば、他人の話や文章を十分に理解出来なかつたり、大きな誤解をしたりすることが少なくなり、それだけ言葉の理解を深めることができると述べている。つまり、言語生活を運用する場合に、慣用句の理解はとても重要な働きを担っていると言える。

調査した結果、7種の慣用句辞典において、「顔」の慣用句の採録状況は、高採録率（「顔」に関する慣用句が4種以上の辞典に掲載されている）、低採録率（顔）に関する慣用句が1種の辞典のみに採録されている）集中式（「顔」の慣用句が一部の辞典に集中して使用されている）の3タイプに分けられることがわかった。

品詞別用法では、動詞慣用句、名詞慣用句、形容詞慣用句があり、用例数は動詞（約7割）>名詞（2.5割）>形容詞（0.3割）の順序で、動詞と名詞でほとんどを占めていた。

句構成は、動詞慣用句、名詞慣用句はおのおの9と6の形式数があったが、実際の用例は限られた少数の形式に集中していた（動詞：「NヲV」「NガV」「NニV」3つ、名詞：「V+N」「NノN」「A+N」3つ）。また、形容詞慣用句は1つの形式が用いられるのみだった。

93ある「顔」の慣用句の意味用法には、「顔の様子・状態（顔形・容貌、表情・顔付、態度・様子）、化粧、出席・訪問、恥、面目・名誉、知名度（人脈）、人、不承知、家族の多いこと、人を正視する、会う・対戦する、姿を隠す、姿を見せる、両顔をくつつける、器量がよいもの」が見られる。顔形・容貌、表情・態度での記載が多いほかに、マイナス評価の用法も多かった。自他動詞が使われているもの、日本の季節や伝統文化と関わる「顔」の慣用句も見られ

た。先行研究で、林（2002）は日韓両国語の「顔」の慣用句に「驚きや恐怖」「恥ずかしさ」を表す場合が多いと陳述した。本論の研究結果と一致性が見られる。

本論は慣用句辞典における「顔」の慣用句を調査したが、コーパスにおける「顔」のコロケーションを中心にして、引き続き究明していきたい。

#### 参考文献：

- アルモーメン アブドラー（2010）「「顔」と「wajh」にまつわる慣用的表現—＜顔＞概念の日本語・アラビア語の対象研究—」『日本語認知言語学会論文集』第10巻 JCLA pp.118-129
- 有菌智美（2006）「顔の意味拡張に対する認知的考察」『日本語認知言語学会論文集』第6巻 JCLA pp.1-12
- 大坪喜子（1985）「名詞慣用句」—特に隠喩的慣用句について—『日本語学』4巻 pp.54-61 明治書院
- 林八龍（2002）『日・韓両国語の慣用的表現の対照研究』明治書院
- 国広哲弥（1985）「慣用句論」『日本語学』4巻 pp.4-13 明治書院
- 倉持保男・阪田雪子（1994）『慣用句の辞典』三省堂
- 向二蘭（2007）「“臉”的隱喩意義探源」『外語學刊』第3期總第136期
- 阪田雪子（1985）「日本語教育における慣用句」『日本語学』4巻 pp.84-90 明治書院
- 趙 聖花（2006）「探討有關“顔”的慣用表達及期形象化的比喻用法—以感覺、情感方面的慣用表達為中心」『日語學習與研究』第1期 總第134期
- 田中聡子, ケキゼ・タチアナ（2005）「『顔』と＜「лицо」＞—＜顔＞の概念の日露対照研究」 pp.103-115『世界の日本語教育』15
- 沖 裕子（2004）「比喻の形式と意味—日本語教育のための基礎研究」『信大日本語教育研究』4, pp.2-15
- 西尾寅弥（1985）「名詞慣用句」『日本語学』4巻 pp.45-53 明治書院
- 宮地裕（1982）『慣用句の意味と用法』明治書院
- 宮地裕（1984）『基本語彙・慣用句・複合語』明治書院

- 村木新次郎（1985）「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』4巻 pp. 15-27『明治書院』
- 森田良行（1985）「動詞慣用句」『日本語学』4巻 pp. 37-43 明治書院
- 頼錦雀（2015）「総体としての語彙から見た慣用句辞典—日華・日漢辞書から—」日本語語彙研究会・台湾大学日本語文学科 主催 2015年語彙研究会特別大会「語彙研究の現在と将来」パネルディスカッション「意味の観点から語彙分析」
- ラダポーン サイソンブーン（2006）「身体部位「顔」の意味拡張：日本語とタイ語の比較」『日本認知言語学学会論文集』
- ラダポーン サイソンブーン（2007）「身体部位を表すタイ語の文法化：「nāa（顔）」を中心に」『日本認知言語学学会論文集』
- 李 晶（2005）「身体辞匯慣用語的中日對比研究」『日語學習與研究』増刊総増 002号
- 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義ら（1989）『日本語大辞典』講談社カラー版
- 白石大二（1969）『国語慣用句辞典』東京堂
- 白石大二（1977）『国語慣用句大辞典』東京堂
- 白石大二（1988）『国語慣用句大辞典』東京堂
- 新村出（2008）『広辞苑』第六版岩波書店
- 鈴木堂三・広田栄太郎（1973）『故事ことわざ辞典』東京堂
- 高見澤孟ら（2011）『新・はじめての日本語教育基本用語事典』アルク出版
- 瀬戸賢一（2007）『英語多義ネットワーク辞典』小学館
- 尚学図書編集（1986）『国語大辞典言泉』小学館
- 尚学図書（1989）『故事ことわざの辞典』小学館
- 謡口明（2016）『ポケット版 慣用句・故事ことわざ辞典』成美堂出版
- 松村明（2006）『大辞林』第三版 山省堂
- 『Weblio 辞典』（2017）[http://www.weblio.jp/phrase/顔\\_1](http://www.weblio.jp/phrase/顔_1)
- 『goo 辞書』（2017）
- <http://dictionary.goo.ne.jp/jn/37629/meaning/m0u/> 新潮社（1995）『新潮文庫の100冊 CD-ROM版』